

入選

廣川 祝子（ひろかわ のりこ） 山田小 5 年生

作品名:「生きのびるために」を読んで

図 書:生きのびるために

今年の春、私は両親と一緒に広島へ行きました。原爆ドーム、平和記念公園、平和記念資料館や広島原爆死没者追悼祈念館を見学し、戦争で苦しむのは、戦っている兵士達ばかりではなくて、戦場になった所に住む、戦争には係わりを持っていない人達も、とても苦しむんだと気付かされました。それが、この本を手取るきっかけになりました。

私は、戦争というものがどんなもので、なぜ起こるのかわかりません。この物語にも、なぜ戦いの中にいなくてはならないのかは書いてありません。それだけに、終わりのない不安な日々の中でくらす人達のきん張が、伝わってきます。

家族や友人が地雷をふんで死んでしまう。兵士に連れ去られて殺される。爆発に巻き込まれて死んでしまう。今、この手の中に抱いている命が消えていく。悲しい。とても悲しいのに、飛行機が落とす爆弾や、兵士が構えている銃口から逃げなくてはなりません。歩き出そうとしても、どこに地雷が埋めてあるのかわかりません。そういう所でも食べ物、水、ねる所を手に入れなくてはなりません。どんなにメチャクチャでも生きていかなければならないからです。戦争を起こした責任は、パヴァーナにはないはず。周りの人達はみんな一生けん命生きています。誰も、誰の悪口も言っていない。でも戦場なのです。

パヴァーナの生き方は、生きのびるには行動するしかない。そういう決心をしなさいと私に迫って来ました。お墓で骨を掘り出して売る。こわされた町や村で、悪い事だと分かっているのに、人気のない家から物をもらうことだってある。女の子の顔をはっているウジ虫を取り除く。生きのびるためには、やりたくないことも、例え一人になってもやり抜かなくてははいけない。私は、とても悲しく思いました。

私は女の子です。大きくなったら必ずお母さんになります。私のお母さんもおばあさんも、ずっと前のおばあさんも、子供を産んで育ててきました。だから私がいいます。誰に言われなくても、女の人は命をつないでいく責任を果たしてきました。

私は、命を育む事、命をつないでいく事が、生命の根っこだと思います。命をつないでいく事は、未来を作る事そのものだと思います。でも戦争は、良いとか悪いとかのはるか彼方で、命を軽くつぶしてしまいます。

戦争に巻き込まれて、それを誰かのせいにして、仕方が無いとあきらめて何もしないのでは、自分から先の命を守れません。無関心は自分を助けません。今、目の前で起こっていることから目をそらさずに、目の前で起こっていることと向き合って生きのびる道を探す。それが出来なければ、後は自分では考えられなくなって、人に頼るだけになってしまうでしょう。私は、「運命は決して外から来ません。知っていても、知らなくても、自分が決めて、自分が命を運んでいくのです。それを理解していない人が、命を運ばれると読んでしまうのです。命を精一杯使っていく事。それが使命の意味なのです。」という言葉が好きです。どう生きるかは私が決める事です。私には命をつないでいく責任があるはずです。そのために、何があっても生きのびる。この本は決意の本でした。

戦争は本当に悲惨です。広島平和記念公園の折り鶴の数がそう言っています。戦いをしない決意が必要だと思いました。